

第3章 サッチャー政権以降のイギリス・アルゼンチン関係

第1節 リース案の復活と挫折

1979年5月、マーガレット・サッチャー(Margaret Thatcher)保守党政権が誕生する。サッチャーは前任者とは異なり、それまで外交経験の全くない首相であり、外交センスにも乏しかった¹³⁴。そのため外相には老練なピーター・キャリントン(Peter Carrington)が任命されたのである。しかしキャリントンは就任早々ローデシア独立問題に忙殺されており¹³⁵、またアルゼンチン側でもビーグル海峡の領有権をめぐる交渉に没頭していたため、フォークランドにかかわる外交交渉は1980年4月、ニコラス・リドリー(Nicholas Ridley)外務閣外大臣とコモドーロ・カヴァンドーリ(Comodoro Cavándori)外務副大臣の間で再開されることになる。

その頃、外務連邦省、国防省はキャラハン政権時代の検討を受け、フォークランド諸島の防衛体制を見直し、任務部隊を諸島に常駐させるという「フォークランド要塞化」案の検討をしていたが、リドリーはそのような案が財政的には現実的ではないことを理由に拒絶していた。リドリーの腹案は以前政府内で検討されていた諸島のリースにあり、キャリントン外相も同案が現実的であると判断していた¹³⁶。

6月、キャリントンはリース案を内閣防衛委員会に提出し、委員会は以下のような結論を導き出している。

- ① 名目上の主権はアルゼンチン側に委譲する、
- ② そのうえで諸島をイギリスが借り受ける。期間は無期限が好ましいが、それが無理であればなるべく長い期間に設定する。その間島民の経済的自立を支援する、
- ③ イギリスの同諸島に対する行政権、領海権は引き続き維持される、
- ④ ・200海里以内の漁業権はイギリス・アルゼンチン間で協力する。
 - ・同じく海底油田に関しても両国で共同開発を行う。
 - ・アルゼンチンは諸島の経済発展に寄与する¹³⁷。

8月25日、リドリーはこの案を携え、ジュネーブでカヴァンドーリとの秘密会談を行った。リース期間の条件を除くと、カヴァンドーリはおおむね好意的であったようである。アルゼンチンは1981年3月にビデラ大統領からロベルト・ヴィオラ(Roberto Viola)陸軍参謀総長へ政権が禅譲される予定となっており、それまでにフォークランド諸島の帰属権に関する何らかの成果が必要とされていた。同年11月7日にも両者は会談し、互いの条件を確認しあったが、リドリーにとっての問題はむしろ島民をいかに説得するかにあった。しかし島民は自分たちが「イギリス国民」であることに固執しており、またリドリーは条件案について議会のフォークランド委員会とは相談していなかった。

¹³⁴ Paul Sharp, *Thatcher's Diplomacy* (Macmillan 1997), p.28.

¹³⁵ マーガレット・サッチャー (石塚雅彦訳) 『サッチャー回顧録 (上)』 (日本経済新聞社 1993)、28頁。

¹³⁶ Lord Carrington, *Reflect on Things Past* (William Collins 1988), p. 355.

¹³⁷ Freedman, *Official History*, p.112.

11月22日、リドリーは自信満々にポート・スタンレーを訪問するが、結果は惨憺たるものであった。現地のレックス・ハント(Rex Hunt)総督との会談の後、400名の島民と討論を行ったがリドリーの説明は歯切れが悪く、島民から「我々は馬鹿ではない」と返される始末であった¹³⁸。そもそもリドリーは島民を説得しに来たのであり、島民と条件について話し合いに来たわけではなかったため島民側の不満は募り、そのことがマスコミに報じられる原因となる。

ここで両国のマスコミがリース案についてすっぱ抜いたことで、事前にリース案を知らされていなかったイギリス議会のフォークランド委員会、そして左派から右派に至る両党の議員は一斉にリース案に拒否反応を示した。そしてそのような動きに返還反対派の島民が加担することで、リドリーは困難な立場に追い込まれることになる。フォークランド諸島の議会は、主権移譲に関するイギリス・アルゼンチン間の交渉を凍結するよう決議したのである¹³⁹。またこの騒ぎでようやくサッチャー首相もフォークランド問題に関心を向ける始末であった。

さらに問題を複雑にしたのが、1981年1月に議会で決議される予定となっていた、改正国籍法(British Nationality Act 1981)であった。この法律が施行されればフォークランドの島民1,900名の内、1,200名がイギリス国民、残る700名程度がイギリス属領民と区分される予定であり、属領民は将来的にイギリス本土での居住権を失う可能性があった。この問題を解決しない限り、島民はリース案に応じることもなかったのである。そのため12月3日の内閣防衛委員会において、キャリントン外相はウィリアム・ホワイトロー(William Whitelaw)内務大臣に対して、フォークランド諸島民には同法の例外的適用を認めるよう申し入れたが、ホワイトローはこれを拒否している。

1965年の交渉開始以来、イギリス政府の基本原則は現地民意の尊重にあったため、島民が望まないリース案をこれ以上進めることはできなくなっていた。1981年9月1日、ハントはロンドンでリドリーと会談し、島民をリース案に引き戻すのは困難であることを伝え、このハントの訴えによって内閣防衛委員会も同案の実現が難しいと判断するに至った。

他方、アルゼンチン側にとってもリース案は現実的ではなくなってきた。この時点でJICは「アルゼンチン側は外交的解決が絶望的と判断すれば、軍事力の行使も選択肢の1つとなりうる」¹⁴⁰という判断を下しており、これは的を射たものであった。実際アルゼンチン側は、イギリスがフォークランドを占有してから150年の節目に当たる1983年までには「いかなる手段」を使っても解決することを目標としていたのである。

第2節 アルゼンチンからの警告と情勢判断

イギリスでは1981年4月から6月にかけてジョン・ノット(John Nott)国防相を中心に国防政策見直

¹³⁸ Freedman, *Official History*, p.127.

¹³⁹ *Falklands Islands Review*, p.23

¹⁴⁰ Freedman, *Official history*, p.137.

しの作業が進められていたが、イギリス海軍にとって当時の最優先事項は潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM) トライデント I (Trident I) の配備にあり、海軍全体の予算が削減される中では他の装備品にかかわる経費をできるだけ削減しなければならなかった。特にフォークランド諸島に配備されていた氷海警備船「エンデュアランス」は無用の長物として見なされていたのである。海軍の試算によると、「エンデュアランス」の維持には毎年 8 万ポンドの費用がかかるとされていた¹⁴¹。これに対して同艇をスクラップにする場合、わずか 10 万ポンドで済むと試算されたため、当時の厳しい財政事情を鑑みたノット国防相は、「エンデュアランス」を退役させる決意を固めたのである。このようにイギリス政府にとって、フォークランド問題は島民への配慮と共に財政問題からも扱いたいものとなっていたのである。

この決定に対しキャリントン外相は、「エンデュアランス」の退役がフォークランド島民、並びにアルゼンチン政府に誤ったメッセージを送ることになると反対し、退役を取り止めるよう求めていたが¹⁴²、このような意見は支出削減を是とする政府内では少数派であった¹⁴³。基本的に国防省はフォークランド情勢には無関心であり、有事の際の対応もほとんど検討していなかったのである。国防省は 1983 年に退役予定の航空母艦「インヴィンシブル (HMS Invincible)」とそこに搭載するシー・ハリアーを 3 億ポンドでアルゼンチン側に売却することすら検討していたほどであった。このようなイギリスの国防方針をアルゼンチン側から見れば、イギリスはフォークランド諸島の安全保障問題よりも国内の財政問題を優先したように写る¹⁴⁴。キャリントンの意見は杞憂ではなかったのである。

1981 年 12 月 8 日、レオポルド・ガリチェリ (Leopold Galtieri) 大將が軍事評議会によって新たな大統領に選出されたが、ガリチェリの陸軍司令官としての地位は 1982 年末までとなっていたためその地位は盤石のものではなかった。ガリチェリとしては退役までに何としても政治的な功績を残す必要に迫られていたのである。またガリチェリと彼の盟友であった海軍司令官、ホルヘ・アナヤ (Jorge Anaya) 大將は、フォークランド問題の早期解決を熱心に主張する強硬派であった。このようにアルゼンチン側では、ガリチェリとアナヤを中心にフォークランド問題が扱われることになる。ガリチェリは「エンデュアランス」の退役決定がイギリスのフォークランド諸島への軽視の現われであるとして、チリとのビーグル海峡をめぐる領有権交渉よりも、150 周年の節目までにフォークランド諸島を奪回する方を優先したのである。

ガリチェリがフォークランド問題の解決を急いだ理由は既述のように権力基盤の弱さに由来していたが、ガリチェリにも国際情勢に対する彼なりの打算があった。まず当時斜陽の老大国と見なされていたイギリスが本国から 1 万 3 千キロも離れたフォークランド諸島を守ることは、軍事的、財政的な困難が予測されていたし、さらにアルゼンチンは南米における反共活動でアメリカと親密な関係を築いてきたため、イギリスとの戦争になっても最悪でもアメリカが中立を保つだろう、との推測も立てられていたのである。

1982 年 1 月 19 日、早速ガリチェリはアナヤと協力する形で、軍事評議会では協議された国家戦略方針に

¹⁴¹ Freedman, *Official history*, p.147.

¹⁴² Carrington, p.360.

¹⁴³ G.M.Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan 1989), p.37.

¹⁴⁴ *Falkland Islands Review*, p.34.

フォークランド諸島奪回について具体的な方針を盛り込んだのである。奪回の手段については外交的なものと並行して軍事力の行使も厭わないことを決定しており、そこでは奇襲によって島を奪回するということが明記された¹⁴⁵。この時期、アルゼンチンの各新聞はもしイギリス側がアルゼンチンの主張を受け入れない場合、両国の外交関係は断絶し、武力行使もありうる旨を書き連ねていたのである¹⁴⁶。その中で最も有名なものは1月24日付の『ラ・プレンザ (La Prensa)』紙の記事であった。同記事の中でイグレスias・ロッコ (Iglesias Rouco) 記者は「主権の問題をめぐって武力行使という試みが除外されるわけではない」といった趣旨の記事を書き、このような論調はイギリスの『オブザーバー (Observer)』紙でも紹介されている¹⁴⁷。

1月27日、アルゼンチン外務省は、イギリス大使アンソニー・ウィリアムス (Anthony Williams) に対して、主権問題解決のため1年に期限を区切った定期的な交渉の開始を提案した。外交交渉はこれまで何度も繰り返され実施されてきたが、アルゼンチン側が期限を区切るということは異例のことであった。ウィリアムスは交渉の期限が1983年1月、つまりイギリスによるフォークランド領有150周年であったことに不審を抱いていたのである。

この提案を受けて2月27日、ニューヨークで両国間の話し合いが開かれた。アルゼンチン側のエンリケ・ロス (Enrique Ros) 外務次官は、この会談でイギリスの真意を見極めようとしていたのである。すなわちアルゼンチンにとってニューヨークでの交渉はいわば踏み絵であり、もしイギリスが妥協的な姿勢を見せなければ、軍事力による諸島の奪回という選択肢の可能性が高くなるのであった。このようなアルゼンチン側の思惑に対し、イギリスの対応は従来とおりの曖昧なものであった。イギリス側代表のリチャード・ルース (Richard Luce) 外務次官は最初から積極的に話し合いを進める気などなく、ただ交渉を引き延ばすことを目的としていた。ルースは主権移譲の問題における最優先事項は島民の意思にあり、イギリス外務連邦省はそれを尊重するだけである、という姿勢を示したのである¹⁴⁸。これに対してアルゼンチン側は4月以降も定期的な外交交渉の継続を求めたが、イギリス側の回答は5月か6月ぐらいになら話し合っても良い、という曖昧なものであった¹⁴⁹。アルゼンチン外務省としてはイギリスを交渉の場に繋ぎ止め、武力紛争の勃発だけは避けたかったが、このようなイギリス側の対応は、アルゼンチン側の外交的な意図を頓挫させてしまったのである。

この結果に落胆したアルゼンチンのニカノール・コスタ＝メンデス (Nicanor Costa=Mendez) 外相は、「もし主権問題が解決できないのであれば、目的を達成するために最も効果的な手段を選ぶことになるだろう」と武力行使を仄めかした¹⁵⁰。さらに3月1日、アルゼンチン外務省は「イギリス側に解決の意思がない場合、交渉を諦め自国の利益のため今後あらゆる手段を取る」との公式声明を発表した。これらはア

¹⁴⁵ Freedman, *Official history*, p.154.

¹⁴⁶ G.M.Dillon, p.40.

¹⁴⁷ Freedman and Gamba-Sotonehouse, p.25.

¹⁴⁸ G.M.Dillon, p.96-7.

¹⁴⁹ Freedman and Gamba-Sotonehouse, p.26.

¹⁵⁰ Richard Thornton, *Falklands Sting* (Washington: Brassey's 1998), p.89.

ルゼンチン側からの明確な警告であった。

しかしイギリスの反応は鈍かった。インテリジェンス機関、並びに合同情報委員会（JIC）は3月9日に合同情報会議を開催し、アルゼンチンがビーグル海峡問題に対しては消極的になりつつあることと、アルゼンチンの世論がフォークランド問題に痺れを切らしているという事実を確認はしていたが、フォークランド問題に関しては、外交交渉が続いている限りアルゼンチンが極端な行動には出ることはない、という結論であった。もしアルゼンチン側が武力に訴えるとしてもそれは1982年10月以降になるという推測であった¹⁵¹。またイギリス国防情報本部（DIS）もアルゼンチン海軍の強硬的な姿勢はいつものことであり、アナヤ海軍司令官は海軍全体を掌握するには至っていない、という判断であった。このようにイギリスの情勢判断は現実から乖離しており、かなり楽観的なものとなっていたのである。

さらにJICの楽観的な観測は、アメリカ・アルゼンチン関係にも基づいていた。もしアルゼンチンがフォークランドで武力行使を行うとしても、その前にアメリカの理解を取り付けておく必要があると考えられていた。3月にはアメリカのトマス・エンダース（Thomas Enders）国務次官がアルゼンチンを訪問する予定となっていたし、もしアルゼンチンがアメリカに武力行使の可能性を伝えるならば、アメリカからイギリスにも伝わって来るものと想定されていたからである。そして武力行使を行うためにはまずアルゼンチン政府は国際連合に訴え出るとも考えられていたため、イギリスではアルゼンチン側がこれらの行動に出てから対策を練っても十分であると考えられていたのである。このような楽観的な観測は、サッチャーやキャリントンの政策にもかなりの影響を与えていたといえる¹⁵²。

しかしこの頃、ブエノスアイレス(Buenos Aires)のウィリアムス大使はロンドンに警告を発していた。ウィリアムスは秘密の情報源とした上で、もしイギリスがアルゼンチン側の要求を受け入れなければ、3月中の武力行使もありうるかと伝えた¹⁵³。しかし大使館からの警告は度々のことであり、アルゼンチンのイギリス大使館はオオカミ少年と見なされていたのである。そのためロンドンの反応は鈍く、本腰を入れた対応を怠ってしまった。もし南米で有数の軍事力を有するアルゼンチンがフォークランド諸島に侵攻してきた場合、これを物理的に防ぐ手段はほとんどなかったため、イギリスとしてはキャラハン前首相がかつてやったように、有事の際には近海にある程度の規模の艦隊を派遣してアルゼンチンの行動を事前に抑止することしか選択肢がなかったのである。しかしこの案はあまりにコストがかかりすぎるとして採用されることはなかった。

第3節 危機の進展とイギリスの対応

1981年12月、アルゼンチンのくず鉄回収業者、コンスタンティノ・ダヴィドフ（Constantino Davidoff）が、英領サウス・ジョージ島の旧捕鯨施設解体のため同島に上陸した。解体に関してはイギリス政府と

¹⁵¹ Freedman, *Official history*, pp.159-61.

¹⁵² G.M.Dillon, p.97.

¹⁵³ Freedman, *Official history*, p. 163.

の契約に基づいていたが、上陸のために事前の許可をサウス・ジョージア民政府から得ていなかったのである。翌年3月19日、ダヴィドフはアルゼンチン海軍の輸送艦「バイア・ブエン・スセス (ARA Bahaiia Buen Suceso)」によって再びサウス・ジョージア島に上陸したが、その中にはアルゼンチン軍人が紛れ込んでおり、サウス・ジョージア島のクリトビケンに上陸するとアルゼンチン国旗を掲げた施設を設置し始めたのである。

この行為に対してイギリス外務連邦省はアルゼンチン外務省に抗議を行い、フォークランド諸島から22名の海兵隊員を乗せた氷海警備船「エンデュアランス」をサウス・ジョージア島に送り込んで施設を撤去しようとしたが、これに対抗してアルゼンチン海軍も2隻のコルベット船をサウス・ジョージア島近海に派遣したのである。アルゼンチン側の強硬姿勢に驚いたイギリス側は偶発的戦闘による危機の深化を防ぐため、「エンデュアランス」をサウス・ジョージア島沖に待機させ、状況を監視させた。イギリス側が最も恐れたのは戦闘行為がフォークランド諸島にまで飛び火することにあつたので、何とかサウス・ジョージア問題だけを外交的に解決しようとしていたのである。さらに言えば、サッチャー政権はアルゼンチン側を抑止するのか撃退するかといった危機管理の方針を明確に定めないまま「エンデュアランス」を派遣してしまつたといえる¹⁵⁴。中途半端な手段は危機をエスカレーションさせるだけであつた。

3月23日、キャリントン外相は危機の収束のためイギリス側が譲歩する姿勢を初めて打ち出した。キャリントンはコスタ＝メンデス外相に対して、サウス・ジョージア島からアルゼンチン軍部隊を速やかに撤去させればイギリスは外交交渉で妥協する用意があることを緊急に伝えた¹⁵⁵。しかしその日、アルゼンチン側では軍事評議会が開かれており、サウス・ジョージア島から部隊を撤収させないということがすでに決定されていたのである。アルゼンチン側から見れば、サウス・ジョージア島から人員を引き上げるといふことは、イギリス側の恫喝に屈したこととなるため、強硬派のガリチェリ大統領にとってそれは受け入れがたい選択であつた。後知恵になるが、イギリスの外交的妥協が軍事評議会の決定よりもう1日でも早ければ、外交的妥協の可能性が残されていたといふことができるが、もはやこの時点では望み薄であつた。

ただしアルゼンチン側としてもサウス・ジョージア問題を長引かせるのは得策ではなく、危機の收拾について議論されていた。そして3月26日、軍事評議会は最終的にフォークランド諸島への侵攻を決断したのであつた。翌日、コスタ＝メンデス外相は公式見解を發表している。

「サウス・ジョージア島に上陸したアルゼンチン国民の身柄は保護されなければならない。現在、アルゼンチン海軍の極地輸送艦「バイア・パライズ (ARA Bahia Paraiso)」を同海域に向かわせており、必要に応じてあらゆる措置を講ずる用意がある」¹⁵⁶

¹⁵⁴ Paul Sharp, *Thatcher's Diplomacy* (London: Macmillan Press Ltd. 1997), pp.60-3.

¹⁵⁵ Freedman, *Official history*, p.182.

¹⁵⁶ Freedman, *Official history*, p.188.

この発表はブエノスアイレスのウィリアムス英大使には晴天の霹靂であり、イギリス側は外交的手段によって状況を打開することが極めて困難になっていることをようやく悟ったのである。これに対してアルゼンチン側は宣言とおり、「バイア・パライズ」によって 500 名もの海兵隊員をサウス・ジョージア島のリース港に送り込んだ。

この状況に直面したサッチャー首相は、キャリントン外相に外交的妥協点を模索し続けることを命じると共に、国際司法裁判所への提訴も検討していた。そしてここで両国が当てにしたのはアメリカであった。周知のとおりイギリスはアメリカと長年友好関係を維持してきたが、アルゼンチンも南米における反共政策でアメリカに協力していたのである。それまでのアメリカの立場は、フォークランド問題はイギリス、アルゼンチン両国の問題であり、基本的にはこれに関与しないというものであった。危機がピークに達しつつあった 3 月 29 日、駐米イギリス大使ニコラス・ヘンダーソン (Nicholas Henderson) はウォルター・ストーセル (Walter Stoessel) 国務副長官と会見し、アメリカのイギリスへの支持を取り付けようとしたが、ストーセルからの回答はアメリカが中立を維持するという冷淡なものであった。

サッチャー政権は政権発足以降、フォークランド問題にあまりにも無関心であり続けた。フォークランド情勢が緊迫した 1977 年、キャラハン政権は抑止の意味で艦隊をフォークランド近海に派遣するという決断を下したが、サッチャー政権はフォークランドに残っていた唯一の氷海警備船を退役させるとする真逆の決断を下し、外交的にもアルゼンチンに対して何ら警告を送ることもしなかったのである。外務連邦省はリドリーによる島民の説得にいたずらに時間を費やしていただけであった。サッチャーは 3 月 9 日に国防省に対して非常時の対策を練っておくよう指示していたが、その後 2 週間は具体的な検討は行われていない。さらに 3 月 22 日になってもイギリスの情報機関は問題がサウス・ジョージア島にあり、よもやフォークランドにアルゼンチンが侵攻して来るなどとは想定していなかったのである。しかしこのような判断はアメリカも同じで、3 月 26 日の中央情報庁 (CIA) は、アルゼンチンによる軍事侵攻の可能性は当面ないだろうと大統領に報告していた¹⁵⁷。

3 月 28 日午後、イギリス政府通信本部 (GCHQ) はアルゼンチン司令部から潜水艦「サンタ・フェ (ARA Santa Fe)」に索敵の指令が出ていることを捉えていた¹⁵⁸。そしてその索敵地は、フォークランド諸島のスタンレー沿岸となっていた。これは明らかにアルゼンチン側がフォークランド諸島に対して軍事行動を起こす予兆であったが、アルゼンチン関連の情報で混乱していた国防省はこれを十分に吟味することができなかつたようである¹⁵⁹。また同日、アナヤ提督がサウス・ジョージア島でアルゼンチン人が殺害されないう限りフォークランドには手を出さないと発言したことにより、この情報の重要性が十分に認識されなかつたのである。

イギリスが重い腰を上げて対応を見せ始めたのは 3 月 29 日になってからのことであった。この日、200

¹⁵⁷ Freedman, *Official history*, p.198.

¹⁵⁸ Aldrich, p.397.

¹⁵⁹ Freedman, *Official history*, p.198.

名の海兵隊員と物資を搭載した補給船「フォート・オースティン (RFA Fort Austin)」が急遽、南大西洋に送られたのである。また同日、ブリュッセルに向かうサッチャーはキャリントン外相と打ち合わせを行い、非常時の場合にはすぐに部隊を派遣できるよう準備を整えておくよう指示した。これを受けて4月1日に原子力潜水艦「スパルタン (HMS Spartan)」と「スプレンドイド (HMS Splendid)」をフォークランド諸島近海に送る決定が下された。到着は11日の予定であり、その任務は情報収集と「エンデュアランス」の護衛であった。もし「エンデュアランス」が攻撃を受ければ、原子力潜水艦の存在をアルゼンチン側に知らせてでも、アルゼンチン艦隊を抑止するというようになっていた。

同じ頃、ジブラルタルに寄港していたフリゲート艦「ブロードソード (HMS Broadsword)」と「ヤーマス (HMS Yarmouth)」もフォークランド近海へ送られることとなった。ただしイギリス海軍はこれ以上の艦隊を南大西洋に送ることに難色を示していた。まずは派遣にかかるコストが莫大なものとなる上、艦隊派遣決定のニュースはアルゼンチン側を露骨に刺激するであろうし、艦隊が現地に到着するまでに2週間にかかるため、その間、手薄なフォークランド諸島に対してアルゼンチンが軍事行動を起こしてしまう危険性が高くなるためであった。海軍はとりあえず何でも良いから近くにいる艦艇を送るという政府の方針には反対で、航空母艦、原子力潜水艦、ミサイル駆逐艦、フリゲート艦からなる任務部隊を編成してから派遣を検討していた。ただしそのためにはさらに1週間ほど時間がかかったのである。また英海軍は所有する7隻の原子力潜水艦の内、すでに2隻を南大西洋に派遣しており、もう1隻の追加も検討されていたが、残る4隻では他の海域での情報収集活動や対ソ核抑止に支障を来すことが想定されていた。

このようにイギリス側はサウス・ジョージア危機を受けて、それまでの外交的手段を放棄して任務部隊派遣による抑止策に打って出たが、その策は中途半端なものであったと言わざるを得ない。しかも問題はすでにアルゼンチンが侵攻への意図を固めていたことと、この段階でもまだイギリス側の危機感がそれほど切迫していなかったことである。3月31日時点でのJICの情勢判断は「アルゼンチンはサウス・ジョージア問題を逆手にとって交渉の材料にしようとしている」というものであり、アルゼンチンによるフォークランド諸島侵攻の可能性については想定されていなかった¹⁶⁰。このようにぎりぎりの段階においても、イギリスのインテリジェンスは明確な警告を発することができなかったのである。情勢判断を行った分析官は、アルゼンチンの狙いがサウス・ジョージア島での挑発にイギリスが痺れを切らして行動を起こすことであり、よもやアルゼンチンが先に仕掛けて来ることなどない、という思い込みに陥っていたのである。これを受けてサッチャーやキャリントンもアルゼンチンがフォークランドに侵攻して来ることなどあり得ないと考えていた¹⁶¹。

戦後、アルゼンチンの侵攻を許したことについて、フランクス (Lord Franks) を委員長とする諮問委員会が設置され、サッチャーの政治的責任についての検証が行われたが、その結論は「侵攻を予測することは不可能であり、事前策を取ったとしてもアルゼンチンの侵攻を抑止できたかどうかは疑問である」と

¹⁶⁰ Freedman, *Official history*, p.206.

¹⁶¹ Carrington, p. 362; サッチャー、218頁

いう内容であった¹⁶²。

第4節 侵 攻

3月31日午後6時、政府通信本部（GCHQ）は通信傍受によって、アルゼンチンの海兵部隊一個大隊が4月2日にはフォークランドのスタンレーに達するという事、そしてブエノスアイレスから在英アルゼンチン大使館に対してすべての機密書類の焼却命令があったという決定的な情報を得た¹⁶³。これらはすぐさまノット国防相に伝えられた。ノットはこの時の様子を以下のように記している。

「我々は以下の4点を知るようになった。まずはアルゼンチンの潜水艦がスタンレー付近に配備されたこと、アルゼンチン艦隊が侵攻のため出動していること、アルゼンチンの上陸部隊が民間の船で運ばれていたこと、そして在英アルゼンチン大使館はすべての書類を破棄するよう本国から命じられたことであった」

164

この情報がノットからサッチャーにも伝わると、サッチャーはようやくアルゼンチンの狙いがフォークランド諸島にあることを悟ったのである。サッチャーはこのノットからの情報について、「これは恐ろしい話で、全く受け入れがたいものであった」と述懐している¹⁶⁵。サッチャーは急いでアメリカのロナルド・レーガン（Ronald Regan）大統領、そしてフォークランドのハント総督に書簡を送り、アルゼンチンが武力侵攻に訴えつつあることを伝えたのである。サッチャーは、レーガンがガリチェリ大統領を説得してくれることを期待していた。4月1日、レーガンはサッチャーに返信し、「アルゼンチンが交渉を放棄し、武力に訴えようとしていることは遺憾である。我々は現在、アルゼンチンが思いとどまるよう手段を尽くしているところだ。（中略）我々はあなた方に対してできることはすべてやるつもりである」とガリチェリに対する説得工作を行うことと同時に、アメリカの立場がイギリス寄りであることを伝えたのである¹⁶⁶。

一方3月31日の夜、ポーツマスからロンドンに戻ってきた第一海軍卿ヘンリー・リーチ（Henry Leach）提督は、海軍が作成したノット国防相へのメモを見て仰天した。そこにはアルゼンチンのフォークランド上陸予想が4月2日と明記されているにもかかわらず、「これ以上の増派は不要」と全く矛盾する内容が記されていたのである。リーチは制服姿のまま下院議会へ向かうこととなった。そこでは原子力潜水艦をもう1隻派遣するかどうかでサッチャーやノットが議論している最中であった。リーチは中途半端な艦隊派遣を行うべきではない旨を説明し、航空母艦「ハーミーズ（HMS Hermes）」と「インヴィンシブル（HMS Invincible）」、そして可能な限りの護衛艦艇と上陸用の1個旅団を派遣することを提案した。サッチャー

¹⁶² Lord Franks, *Falklands Islands Review* (London: HMSO 1983), p.73.

¹⁶³ Aldrich, p.397.

¹⁶⁴ Nott, *Here Today Gone Tomorrow* (London: Politico's Publishing Ltd. 2002), pp.260-1.

¹⁶⁵ サッチャー、226頁

¹⁶⁶ Nicholas Wapshott, *Ronald Reagan and Margaret Thatcher*, (New York: Sentinel, 2007), p.164.

はもしフォークランドが占領された場合、奪回が可能かどうか尋ねたが、リーチの回答は数カ月あればかならず奪回してみせる、というものであった¹⁶⁷。ノットはリーチの意見に懐疑的ではあったが、サッチャーと話し合った結果、リーチに任務部隊を編成するよう命じた。後知恵的に言えば、リーチの進言はその後の戦争の帰趨を決める重要なものとなったのである。

4月1日朝、閣議が招集され、アルゼンチン軍部隊がフォークランド諸島に侵攻中であるとの情報が閣僚に伝えられた。サッチャーはアメリカによる仲介の報を待ち続けていたが、レーガン大統領もガリチェリ大統領と連絡が取れない状況であった。その間にもアルゼンチン側が索敵行動を活発化させているという情報がロンドンに届いていたのである。同日夜にも再び閣議が開かれ、遂に任務部隊をフォークランドに派遣することが決定された。

しかしこの段階においてもサッチャーはアメリカによる説得に一縷の望みを賭けていた。すでに駐アルゼンチンのアメリカ大使がガリチェリ大統領と面会していたが、國務省の記録によると大統領は「何を言っているのか全く訳がわからない」状態であった。ワシントンではヘイグ國務長官がアルゼンチン大使に対して警告を行っていた。

「もしアルゼンチンが武力行使に訴えれば、南半球におけるアルゼンチンとアメリカの協力は終焉し、我々はイギリスの側に付くことになるだろう」¹⁶⁸

4月1日午後8時半頃（ワシントン時間）、レーガンはようやくガリチェリと電話で話すことができた。レーガンはガリチェリに対して侵攻を思いとどまるよう説得したが、ガリチェリはレーガンに構わず自分たちの大義について演説し始める始末であった。レーガンが「ガリチェリと40分程話したが説得はできなかった」との感想を残しているように説得は失敗であったが、最後の手段としてジョージ・ブッシュ（George H.W. Bush）副大統領をアルゼンチンへ派遣する案まで考えられていたのである¹⁶⁹。説得に失敗したレーガンはサッチャーに対して、「我々は領土問題に関しては中立であるが、アルゼンチンが武力行使を行った場合はその限りではないだろう」と有事の際のイギリス支持を打ち出している¹⁷⁰。

その頃、フォークランドではサウス・ジョージア島から引き揚げてきた「エンデュアランス」が22名の海兵隊員をスタンレーに再上陸させ、ハント総督も海兵隊員を集め、アルゼンチンの上陸に備えるように指示していた。しかし2隻の原子力潜水艦と200名の海兵隊員を輸送する「フォート・オースティン」はいまだ大西洋を南に向けて航行中であり、フリゲート艦隊もようやくジブラルタルの海軍基地を出港したところであった。これら部隊の到着は4月13日前後と予定されていたのである。またリーチの編成した任務部隊の出港も4月5日の予定であった。他方、アルゼンチン側は4月1日19時（現地時間）に「ロ

¹⁶⁷ Freedman, *Official history*, p.209.

¹⁶⁸ Freedman, *Official history*, p.214.

¹⁶⁹ Ronald Regan, *An American Life* (New York: Simon & Schuster 1990), p.358.

¹⁷⁰ Freedman, *Official history*, Vol.II, p.130.

サリオ作戦 (Operation Rosario)」を発動し、同日 23 時、最初の部隊がスタンレー付近に上陸したのである。